# ＜こんにちは「京田辺市長」＞

## 地域の基盤がゆるぎない地域社会をつくる
## ～ベースは「人とのつながり」～

**上村　崇**さん（京田辺市長）
**岡本哲也**さん（京都自治総研副理事長・自治労京都府本部執行委員長）
司会／**高橋直樹**さん（京都自治総研専務理事）
**吉田　誠**さん（京田辺市職執行委員長）
**志場吉洋**さん（京田辺市職副執行委員長）

**高橋**　今日はお忙しい中、お時間を頂きありがとうございます。どうかよろしくお願いいたします。

**岡本**　早速ですが今年の施政方針を読ませて頂きました。市長になられてから早くも３年が経ち、予算は３回組んでおられますが感想はいかがですか。

**上村**　３回の予算を組んだんですが、そのうち２年間は新型コロナウィルス感染症対策で大変でしたね。ただ１年より２年目、２年目より３年目の方が、より思いが詰まった予算になってきています。それだけ職員のみなさんにも頑張って頂いているということです。

**岡本**　京田辺市会議員から京都府会議員を経験

し、そこから京田辺市長になられました。運営を含めて経験が役に立っていますか。

**上村**　京田辺市会議員の時に係長級だった方たちが、僕が市長になった時、部長級になっておられました。人間関係をゼロから構築することなく、その当時にいろんな話をしたメンバーがいてくれたから「助かったな」という思いです。あと、府会議員をやっていたので、府庁にいくとお世話になった方たちが課長級でおられて助けて頂いています。もう一つは、国から京都府に出向されていた方たちがいる。このメンバーも今では幹部クラスになっておられる。近々総務省に行くんですが、「テレワークの予定だったけれど出勤して待っているわ」と、心強いですね。

**高橋**　京都府下の首長の方々も府会議員の出身者が多いですが、どうですか。

**上村**　首長になっている府会議員出身者では城陽市の奥田市長が４期、僕と長岡京市の中小路市長が３期、亀岡市の桂川市長、向日市の安田市長、福知山市の大橋市長が２期。みんな時期が重なっている。困ったことがあったらやり取りしています。横のつながりがあるのはやはり大きいなと思いますね。

## コロナ禍でも地域のつながりを大切に

**岡本**　３年のうちの２年間がコロナ対策で、ワクチン予約の電話がパニックになり、行列もできて大変でしたね。全部初めての経験でしたが、どうでしたか？

**上村**　ワクチン接種については５月１日から電話受付を始め、ゴールデンウィーク中は電話が繋がらず、初日から「これは大変だ」となり、「臨時の窓口をつくる必要がある。誰が出る？」という話になって、「部長級全員が前に出て頭を下げよう」ということになりました。朝７時に出勤し、案内を含めてやろうと。当時、京都府から理事として出向で来てもらっていた今の副市長にも「すいません」と謝ってもらって、うまく話を聞いてもらって誠心誠意対応してもらったのがよかったと思います。助けられたなと思いました。

**岡本**　その後はスムーズに。

**上村**　はい。でも困ったことは、人口規模の小さい自治体はワクチン接種も早く進むし、供給もゆとりを持って出来た。ところが京田辺市は開始から５ヶ月後の９月末になって「最後のワクチン供給がありません」となったんです。「これ、どうする？」という話になって京都府に相談しても無いと…

　国としての仕組みづくりの問題だと思うんです。国は都道府県にスケジュールを出している。都道府県は府内全般に対する供給枠の中から大規模接種枠の分を計算して市町村に示すのでタイムラグが生じる。このあたりをきちんと整理して頂く必要があると思います。

**岡本**　苦情を言われるのは自治体ですからね。

**上村**　「予約が出来ない」と言うと「なんでやねん」と言われるのは職員ですからね。「もう少し仕組みがあるのでは？」と思います。

**岡本**　施政方針にもありましたが、「コロナ禍の中で孤立させない」ことが重要かなと。また自殺が増えています。施政方針の中では「つながりを大事に」と話されていましたが、ウイズ・コロナを含めて、市長としての対策は？

**上村**　孤立というか、コロナ禍で悩む方に関し

て、行政として対応が必要と感じた事案がこれまでにいくつかありました。例えば、大学のあるまちとしては、親元を離れて一人暮らしする学生さんをケアするため、大学とうまく連携した対策を考えていかないといけないと思っています。

また、不安や体調を崩して救急搬送される件数も増えたようにも感じます。地域レベルでつながることが難しくとも、広い意味でサークル活動などでつながりができていたら改善できる部分があったのではないかと思います。コロナ禍で何もかも中止していますが、コーラスや絵画などをはじめ、趣味や文化、スポーツ、その他のサークルなど、「重層的なつながり」を大切にするまちづくりをしておかないといけないと思っています。

**岡本**　外に出ていく気持を持ってもらうような動機づけが大事ですね。

**高橋**　残念ながら延期となった京田辺市民まつり（たなフェス）の今後の展望はどうですか。

**上村**　仕切り直して、2022 年度は市制２５周年の節目の年となるので、それと合わせて第一回目の「京田辺市民まつり（たなフェス）」ができる形がいいのではないかと考えています。京田辺で生まれ育ったみなさんに、「あんな祭があったな」と言ってもらえるようなものをつくって、まちの思い出のきっかけづくりをしたいと思っているんです。同志社大学とも連携してやりたいなと。

## 大前提は「子育てしやすいまちづくり」

**岡本**　いよいよまちづくりの話に移りたいと思います。まず、「総合計画」について、「安全・安心」から始まって「田園都市」まで、少し市長から説明を頂きたいと思います。

**上村**　５つの柱があって、「安全・安心」「緑」「健康」「教育」「田園都市」とあります。どれも重要ですが、まずは「子育てしやすいまちづくり」が大前提にあると思っています。

中学校給食が長年の課題で、僕が市長になった時、「自校方式をできないか？」と考えたんですが、色々と難しい課題もあり、結果的にはセンター方式となりました。しかし、一定の道筋ができて、2024 年４月のスタートに向けて、現在準備を進めています。

たしかに中学生に聞いたら「弁当の方がいい」と言います。でも、保護者の皆さんに聞くと「弁当は残されないように好きなものを入れたくなる。しかし給食は好きではないものも出てくる。身体のことを思うと大事だと思う」と。多様化する働き方の中で、中学校給食実現への道筋を付けることができたのは、とても大きかったと思っています。

それと次の課題にもつながりますが、子どもの数がドンドン増えてくるので、どれだけ保育所を整備しても追いつかない。「このへんまで整備したら」というのがないんです。2022 年４月に小規模園を１園、2023 年４月には公立のこども園をつくって保育枠を設けますが、これでも足りないかもしれない。もう一度、保育人数の洗い出しを行い、計画を立て直す必要があるかもしれないという話をしています。でも、子どもさんが増えるのはとてもうれしいので、頑張っていきたいと思います。

また、市立三山木小学校は 2022 年度にプレハブ校舎をつくりますし、市立田辺中学校も 2

023 年度にプレハブ校舎をつくる。すでにプレハブがあるのに、もう一棟つくらないといけない。「プレハブですか、昭和何年代の話ですか？」「そうなんです…」と。

**岡本**　でも最近はすごくいいプレハブですよね。

**上村**　いいプレハブですよ。ただ保護者からすると「グラウンドが狭くなる」、「部活動ができなくなる」と。今の時代、新しい小学校や中学校はつくれないので、あとは教育委員会とも相談しながら、生徒数が偏在している学校について、どう偏在をなくせるのかも含め考えています。

**岡本**　京都府も「子育て日本一」を掲げています。うまく連携し、予算面でも確保ができればいいですね。

**上村**　「安全・安心」では、私が就任してから防犯カメラの設置について大幅に市の方針を変えたんです。それまではあまり設置する方向ではなく、駅前は設置するけれど、主要交差点や通学路になる交差点までは意識していなかった。でも、抑止力というよりも、市民のみなさんに安心感を持ってもらうために、こうしたところにもカメラを設置していこうと。通学路でもある主要交差点で何か起こった時、すぐにわかるようにやっていこうと話をしています。でもカメラがありすぎるのも、プライバシー上では問題なので、気をつけていくべきところはつけようと議論しています。

次に「緑」、ゼロカーボンですけれど、若い方たちと話をしても京田辺は「都会ではないけれど、緑のある雰囲気、適度な田舎感がいい」と。僕もここで生まれ育った人間として、都市化されたところも必要だけれど、里山があって、緑がある風景は大事にしていきたい。そこで、いろいろと課題もありましたが、一休寺の裏山の古墳を買い取ることになりました。庁内でも議論し、普段は開発に意欲的な皆さんも「ここは絶対、まちの品格として残すべきです」と、みんなの思いが一つになったような気がします。

「健康」では「水辺の散策路」全１０ルートが 2020 年度に完成しました。大々的にお披露目をしたかったんですが、コロナ禍で出来なくてシルバー人材センターと相談して「ウォーキングイベント」を実施しました。

「田園都市」は新名神の城陽、八幡間の南側に１３ヘクタールの工業専用地域の造成をスタートしています。これが 2024 年２月頃にできあがり、税収アップにもつながるし、開発できるところはきちんと開発して、緑を残すところは残してバランスよくやろうということで、まちづくりを進めています。

**高橋**　2023 年のＮＨＫ大河ドラマとも関連があるとお聞きしましたが？

**上村**　2023 年、大河ドラマで「徳川家康」を嵐の松本潤さんが演じられます。実は家康最大のピンチだったのが本能寺の変です。家康はその時、堺にいてお供も少ない中、ほんの数日で三河まで逃げているんです。「家康伊賀越えの道」というんですが、京田辺あたりを通っているはずだと。ほんとに京田辺市が舞台になるかどうかは分かりませんが、家康にとったら生きるか死ぬかの一番の舞台だから、家康を大河ドラマ化する時には、「ここは絶対にポイントとなるところだ」と、「家康伊賀越えの道」と合わせてＰＲしていこうと思っています。今、2022 年度に向けて観光協会の事務所の拠点を拡充してポスト・コロナに向けて、「身近な観光のスポットに来てもらえる取り組みができない

か」とやっています。まずは京阪神から来てもらおうと。

**岡本**　子育てで「はぐはぐ赤ちゃん応援事業」はどの様に運営されていますか。

**上村**　これは 2020 年からスタートしました。大きく影響したのは、コロナ対策の一回目の定額給付金について、「基準日以降に生まれた子どもへの対応をどうするか」という議論です。しかしコロナ対策をやる時、真っ先に言ったのが、「バラマキではなく、既存スキームを使ってスピード感を持ってやろう」と。「国からの交付金は毎年は無い。そうであるならば持続的にできるものはないか考えよう」と。「はぐはぐ赤ちゃん」はベビー用品を「保健師が届ける」のが大前提です。そこで妊娠、出産、育児の状況を聞く。初めての赤ちゃんの時に保健師が訪問し相談できたら、悩みや産後ケアの話ができる。僕の思いがあってやっています。

**岡本**　一時よりも継続して子育て、産後を含めて、女性の孤立化、悩んでいる方は多い。つながれるものなら、こちらから手を差し伸べてつながることが大事だと思います。

**上村**　保健師さんが少ないので、シルバー人材センターのみなさんにベビー用品の配達をお願いしています。赤ちゃんに会えるから、年配者のお母さん方がとても楽しみにして、気合を入れて取り組んでくれています。

## 「風を感じる力」を持ってほしい

**高橋**　関連するのですが、これらに合わせて「重点プロジェクト」をつくられていています。この中で今後の取り組みや特徴点を教えてもらいたいと思います。

**上村**　「市民協働による安全・安心な地域のまちづくり」です。2022 年度に三山木駅の近くの銀行跡を活用して「南部まちづくりセンター」にコミュニティカフェをつくります。そこは既存の自治会だけではできない事柄について、たとえば小学校区単位で「子育て」や「防犯」などに関わりを持って、つながれる拠点にならないかと考えています。

**岡本**　市民のみなさんが主体的に活動しやすい仕組みづくりを考えておられますね。

**上村**　これは職員にも言うんですが、「京田辺市役所は市民の願いをすべて支えることはできない。でもその時、『できません』だけでなく、市民といっしょにできることもある。市民だけでできることもある。それが市役所の役割だから、まずは市民が、うまく活動してもらえる下地をつくっていこう」と。「全部やりますわ」とは言えません。

**岡本**　実は京田辺市の職員は半分も市内に住んでおられません。そして住むことも大事ですが、市民と生活圏で交わることができないかなと思っています。

**上村**　大ベテランの元職員の方と話をした時、行政の仕事は「鳥の目、虫の目、魚の目」を持って行うことが大事ですが、さらに「風を感じる力を持ってほしい」と言われました。この庁舎にいて「これをやった方がいい」など、計画を立てても、市民が望んでいることなのか。やったはいいけれど、「こういうやり方の方がいいのではないか」という市民の声が、庁舎の中にいると聞こえてこない。ちょっとした時に聞こえるような関係性も含めて「風を感じられるようになってほしい」と。これは名言だと思います。すべての職員に「外（まち）に出よ」ということではないんですが、ここで住んで生活していたら買い物の最中に「市のことを言うてはるな」と小耳に挟むなど、そういうきっかけが大事かなと思っています。僕もよく近所のスーパーに買い物に行きますが、度々止められて話をしたりします。そういうことを感じられる職員であってほしいと思います。

**岡本**　京都市にはアプリがあり、道路にへこみがあって子どもが自転車で転んだりしたら危険

なので、写真を撮ってメールで送る。すると直しに来てくれます。役所は巡回していても全部は見られないから。地域に住んでいると、そういうことができますね。住居手当なども含めて施策として考えても面白いのかなと。市民税や固定資産税も増えるし、防災体制も組みやすい。

**高橋**　スマホの活用やＳＮＳ、LINE など、ポスト・コロナ時代を見据えて、何かこだわりがあればお聞かせ下さい。

**上村**　子育て世代が多いので、そういう世帯はデジタル化に親和性が高い。より行政に関心を持ってもらえるし、こっちの情報をピンポイントで送ることができるので、これは活用したい。「今日は何々ゴミの日ですよ」と LINE 通知がくるだけで「あっ、そうや、ゴミの日や」と用意して出せる。また、「このゴミ、いつやった。忘れた」という場合に、「何のゴミ？」と LINE 入力したら出てくるなど。今の子育て世代の方には、あたりまえのツールになっているものを、うまく活用することで、市民意識が高まるのではないかと取り組んでいます。

**岡本**　保育所アンケートなどもそうですね。

**上村**　もう一つは子育て中の方々と話をする機会があって、子育ての講座があるとか、セミナーで子どもの預かりがあるなどは、今は電話で受けているけれど、ネットやウェブで予約ができるだけで格段に満足度が高まる。「自治体ＤＸ」と大きい看板を掲げなくてもいいけれど、そういう満足度を高めることによって「このまちに住んでよかった」と思ってもらえるように取り組んでいきたいと思います。

**高橋**　名産品の玉露は、国の賞をもらう方がおられたりして対外的には有名ですが、市内での需要は難しいそうですね。

**上村**　これも観光協会とやり取りしていて、2022 年度には観光協会の拠点を拡充しようと思っています。また、商工会の方とも「玉露のまち・京田辺」と言いながら「どこでお茶を飲めるのか？」という話になって、それなら商工会、観光協会が協力して、たとえば美容室でお茶が普通に飲める、置いてあるなど、ここでしか飲めないのではなく、「こんなところでも飲める」という展開が必要なのではないか、ということになりました。身近にしておかないと滅多に飲まないですからね。ちなみに転入して頂いた方にはお茶器を送らせてもらっています。

**岡本**　高価でなかなか買えないですね。市内の小中学校では飲めないのですか。学校の創立記念日など、そういう時に出してお茶を子ども時から身近に感じられるようにしてみてはいかがですか。

**上村**　茶業青年団が市内の小学校へ出前授業を行っていますが、今後はそういうことも考えていきたいと思っています。

**高橋**　それからせっかくなので、大学連携の話もお聞かせ下さい。

**上村**　京田辺市と大学連携の仕組みとして、「ディスカバリー・ベース」というものをつくりました。初年度（2020 年度）、クラウドファンディング型の「ふるさと納税」をしてもらい、そこで集まった資金で、「ポスト・コロナを見据えて市民生活を豊かにするために、どんなことができますか？」という研究課題で、大学の先生から応募頂いて、今、研究をしてもらっています。

　そのうちの一つは「ウェルネスダーツ」で、ダーツを一つの会場で行うのではなく、分散型の会場でもできるような仕組みができないかと。

ダーツは割り算がないだけで、＋、－、×が全部ある。「投げる、計算する」ので認知症にもいいそうです。「ディスカバリー・ベース」では、どんな研究がいいかを大学の先生方が審査するとともに、同志社大学と同志社女子大学があるので、先生方や学生たちが市内をフィールドに、研究・ワークショップをする場としても活用して頂きたいと思います。

一方で市民のみなさんへは「いろんなニーズをあげて下さい」と、行政と大学と市民がマッチングできるようにやりましょうと。軌道に乗るまで少し時間がかかるかもしれませんが、今年(2022 年)の３月には京都府立大学とも連携協定を結びました。同志社大学、同志社女子大学、京都府立大学が入って、大学との関わりを、より強めていきたいなと思っています。

もう一つは同志社国際の中学校・高校がある。同志社国際に来られる生徒の３分の２は帰国子女なんです。地元の成人式に行っても知っている友だちがいないから、成人式も高校に行く。同志社国際の卒業生は、自分のまちがホームタウンになるんです。ここを大事にしておかないといけない。生徒たちは高校の時は寮に入っているが、大学に入ると寮を出なければいけない。探すなら京田辺市内でロングホームステイをしてもらおうと、高齢者で一人暮らしの方のところに住んでもらっています（京田辺ソリデール)。学生からの意欲は強いのですが、市民の側の意欲も高めていかないといけない。うれしい悲鳴になっていて、大学連携のいいかたちになっていると思います。「大学があるけれど、どんなつながりがあるの？」「学生といっしょに住んでいるねん、私」と。

**高橋**　お孫さんくらいの世代ですかね。

**上村**　「ちょっと電気が切れて困った」「やる、やる」と。毎日、顔を合わせてご飯を食べる昔の下宿ではなく、ちょっとした関わりがあったらいいかなと。

**岡本**　どちらも利益があって素晴らしいですね。

## 地域の基盤がゆるぎない地域社会をつくる ベースは「人とのつながり」

**高橋**　施政方針に「まちづくり」のキーワードとして、「しなやかな地域社会の構築」、「人のつながりが重要」とありますが、これらに対する思いがあればお聞かせ下さい。

**上村**　地域社会というのは行政がすべてのことを考えられるわけではない。行政として「できないことはできない」と言いながら、「ただし地域とつながって、地域の自発的な活動を促しながら、バランスをとって、何かが起こっても対応できる地域社会をつくらないといけない」というのが大前提です。「つながり」って実は「不幸な地域コミュニティ」とも言われていて、災害が起こるなど、何か不幸なことが起こった時、初めてみんなが気づく。でも日常的なコミュニティが大事で、人のつながりが必要だし、困っている方がいたら声をかける。子どもが泣いていたら「大丈夫か？」と声をかけてあげられるような、必ず「つながれ」とは言わないけれど、ちょっとした時にやりとりができる「人のつながり」があって、何かが起こったときに、地域の基盤が、揺るがない地域社会となり、さらには次の時代にもつながるのかなと思っていて、そういうことにこだわりを持ってまちづくりを進めています。

**岡本**　「フレキシブル」という言葉があって日本語では「しなやか」とは訳さない。「しなやか」という単語が、よく出てくるなと。通常、「臨機応変」など使うんだけれど、きれいな言葉なので、いい言葉ですね。

**上村**　地域社会の基盤がきちんとあると、どんなに揺らいだとしても、また次のステップがあると。

**岡本**　弾力性を持って、支えあう。

**上村**　そう、ベースは「人とのつながり」があ

ること。　濃密なつながりを求めているわけではなく、ちょっとした一声が掛けられるような「つながり」が大事なのかなと思っています。

## 「コウモリの目」を持ち「引き算」ができる職員に

**高橋**　それでは最後に庁内の「人とのつながり」についてお聞かせ下さい。「人材育成基本方針」を改定されました。また働き方の見直しが、コロナ禍でクローズアップされていますがいかがですか。

**上村**　人材育成基本方針ですが、これから１０年先、２０年先の京田辺市を担うのは今の４０代。真剣にこの２０年間、まちづくりに頑張ってくれたら、次のまちにつながると思います。業務も大変だけれど、まちの風を感じて、楽しいまちづくりのできる基盤をつくってくれたらと思っています。

元三重県知事で、早稲田大学教授の北川正恭さんが顧問をされておられる人材育成の研修（早稲田大学マニフェスト研究会）に、2020年度から職員を派遣しています。全国から１４０人くらいの職員が参加しています。当時、総務部長とも話していたんですが、三位一体改革で自治体は研修をことごとく削りました。海外研修は難しいけれど、研修費用は削減するものではなく、頑張っていってみようと。今は、第一期生が帰ってきて第二期生が行っています。早稲田大学から、第二期生には人材育成を担当する部署からもきて欲しいとアプローチがあって、参加してもらっています。彼らが１年間のプロジェクトで「人材育成方針はどうあるべきか」を他の都市の方とも議論しています。また職員にアンケートをとりました。その上で、たとえば入庁して１０年間で３つの部署を経験して適性を見て、その方の長きに渡る公務員人生にとって、何がプラスになるのかを考えていけないかと、まずはそういうところからやっていきたいと思っています。それによって上司の意識も変わっていくだろうと思います。

「働き方改革」では、地元に住んで長い通勤時間を解消してもらえるのが理想ですね。また、何とか人員を生み出し、適正な職員配置を行いたいと思っています。最近、若手の職員で退職する職員が増えました。昔のように「役場に入ったら定年まで」というのでは無く、自らのスキルアップも求めているのかもしれません。そういった意味でも「働き方改革」は大切なので、職員組合とも真剣に話をしながら取り組んでいきたいと思います。

**岡本**　ワークライフバランスを重視して頂きたいと思います。以前、自治労京都府本部が行ったアンケートでは、京田辺市の休暇取得率は意外と低かったように記憶しています。国は「年休消化最低５日間」と言うけれど、本当は２０日間の権利を行使できる環境であって欲しい。また、現業職場など３６協定を結べるところについては労基の役割ですが、それ以外の職場について、人事委員会を置かない市町村では、「首長が労基の役割を果たす」と、そういう通知が今年、国から各自治体の人事担当にきています。首長がその責任を果たして頂き、ワークライフバランスの取れた働きやすい職場にして頂いたら、ますますいい人材が集まるのではと思います。

**上村**　鳥、虫、魚の目をもつことと、もう一つ

は「コウモリの目」、逆さに見る。物事を逆さに見るのではなく、「自分が市民の立場だったら、どう受け止めるだろう」と考える、相手の立場から逆さに見る目が大事かなと。４つの目を持ってもらいつつ、「まちの風」を感じるような職員になってほしい。

そしてもう一つは、「引き算ができる職員」になってほしいと言うことです。例えば今ある事業に対して、「これに、もっと足さんならん」と考える。でもＡとＢを足してもＣにはならない。その下にあるＤを落とすことによって効果が上がる。業務内容が低下する可能性があるかもしれないけれど、それを恐れるのではなく、「引き算ができる職員になってほしいな」と。足し算だけになると仕事量が増えるだけですからね。

**高橋**　減らしたら、そこに対する苦情が出てくるので、どうしても躊躇する。

**岡本**　市長がそう言うと職員はしやすいけれど、市長は辛いですね。どちらかと言うと「あれも、これもやれ」と言いたいところですからね。でも、「しなやかな人材育成」でお願いします。

**上村**　最後、締まりました。ありがとうございました。

**高橋**　今日はありがとうございました。